

今年も、職員対象のインフルエンザワクチン接種が始まります。

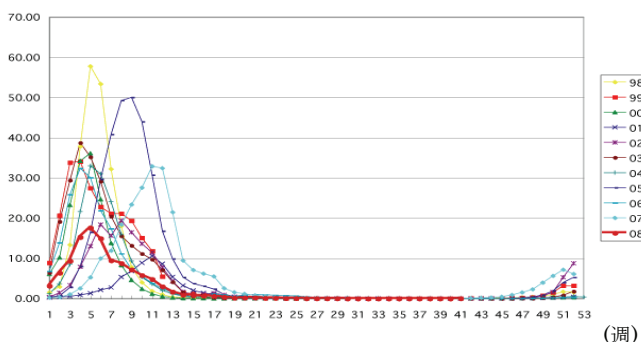
インフルエンザは、生活水準・医療水準が向上した現在の先進工業国においても、多くの死亡と関連している感染症です。我が国においても、例年1万人内外の死亡がインフルエンザに関連して起こっている（超過死亡）と考えられています。

心肺疾患などを合併する高齢者などはハイリスク群であり、一般医家のみならず、高度先進医療を担当する医療機関においても、十分な対策が必要な疾患です。

インフルエンザは例年年末から流行が始まり、1月、2月に流行のピークを迎えます。

ワクチンの効果は接種後約1ヶ月程度でピークを迎え、5ヶ月程度持続します。現在、当院で行っているワクチンスケジュールではほぼハイシーズンは対応可能と考えられます。

(定点あたり患者数)



(国立感染症研究所 感染症情報センターHPより)

なぜ毎年、接種を受けないといけないのですか？

インフルエンザは年により流行する株が変わっていきます。そのため、年ごとに接種を受け直す必要があります。日本では、毎年2月ごろにWHOが決めた推奨株を元に、国内でのシーズン前の抗体保有状況やワクチンの作りやすさ・安定性などを考慮し、専門家会議の結果を受けて厚生省がワクチン株を決定しています。



どのくらい効きますか？

65歳以下の健康な成人では6-7割の発症を予防できるといわれています。高齢者でも約半数の発症を予防できるとされ、インフルエンザ関連死亡を7-8割程度減少できます。6歳以下の小児の有効性は低く、発症予防は2-3割程度といわれています。現在我が国で使用されているワクチンは、サブユニットワクチンといわれる不活化ワクチンの一種です。残念ながら、罹患を完全に予防するこ

とはできません。むしろ、主な目的は重症化予防です。

アレルギーの心配はありますか？

インフルエンザワクチンは比較的、局所反応の多いワクチンです。1-3割の方が軽度の接種部位の腫脹が認められますが、数日で軽快するため、多くの場合は大きな問題にはなりません。

インフルエンザワクチンは製造過程で鶏卵を使うことから、タマゴアレルギーの方は注意が必要です。しかしながら、副反応の発生は、アレルギーのない方とほぼ同様です。ほとんどの場合、安全に接種できます。



妊娠中の接種は可能ですか？

現在のところ、インフルエンザワクチンの接種が妊婦・胎児へ悪影響を及ぼすとした報告はなく、安全に接種できるものと考えられています。妊婦がインフルエンザにかかった際には重症化する可能性があることから、14週以降の妊婦の接種が推奨されています。



かかっても抗ウイルス薬を飲めば、出勤してもいいのではないですか？

現行の抗ウイルス薬は発熱期間を約1日程度短縮します。解熱後も数日間ウイルスを排出しているため、十分感染源になり得ます。またオセルタミビルなどの抗ウイルス薬の耐性も拡大しており、必ずしも罹患期間の短縮は期待できません。医療従事者としては、できるだけ感染する確率を減少させることが必要です。

トリインフルエンザには有効ですか？

現行のワクチンはA/H3N2亜型、A/H1N1亜型、B型に対して有効なサブユニットワクチンです。従って、A/H5N1に対するワクチンではなく、有効性は期待できません。現在、A/H5N1亜型のワクチンが開発されて、プレパンデミックワクチンとして一部の医療従事者に接種されていますが、この株が流行するという保証はなく、現在のところ確実に有効なワクチンは開発されていません。

